

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：34302

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520845

研究課題名(和文) 聖イポリト祭の実証的研究によるメキシコ植民地時代の新たな解釈

研究課題名(英文) An analysis of a Mexican colonial San Hipolito festival and its interpretation rethought

研究代表者

立岩 礼子(Tateiwa, Reiko)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号：80321058

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、メキシコ市において1528年から1812年まで開催されたイポリト祭について、その目的と意義を明らかにした。本研究では、主としてメキシコ市参事会の議事録をもとに、この祝祭の準備、進行、予算、参加者、参加形態などを詳細に分析し、スペインによる植民地支配において有した重要性についてまとめた。その結果、本国スペイン国王への忠誠を表す年中行事であったが、とりわけ16世紀から17世紀にかけてメキシコ市が抱えた対先住民の防衛、飲料水の確保、軍事力の強化の3つの側面からメキシコ市の存亡に不可欠な祝祭であることが初めて明らかになった。

研究成果の概要(英文)： This survey analyzed the importance of a Mexican colonial christian ritual festival called San Hipolito, which was held from 1528 to 1812. The documents revealed that it was not a simple christian annual event of the saint, and that the festival had three purposes: to protect the Spaniard in Mexico City from the native Indians; to provide the capital city with the water for drink; and to train the civilians against foreign enemies.

研究分野：西洋史

キーワード： 聖イポリト祭 聖イポリト像 メキシコ市参事会 征服記念 先住民の反乱 飲料水確保 軍事力強化
スペイン植民地支配

1. 研究開始当初の背景

(1) ヨーロッパ近代史とくにスペイン近代史において、祭礼研究は 1990 年代に活況を呈し、その後も衰えていない。祝祭研究は、もともと文化人類学において 1960 年代にヴィクター・ターナーが先鞭をつけた宗教儀式や通過儀礼に関する研究の蓄積があり、80 年代にアンソニー・コーエンやベネディクト・アンダーソンによって、コミュニティ全体を文化的構築物と捉えて研究が行われるようになってきている。一方、ヨーロッパ近代史においては、とくにアナール派のピーター・バークが祝祭をヨーロッパの伝統的民衆文化の基礎とし、結婚式を通じて親族関係を、聖人祭を通じて共同体システムを、復活祭、降誕祭、カーニバルなどの年中行事を通じて、やはり社会全体を研究の対象にした。以上の研究によって、祝祭は階層意識による閉塞感の強い日常からの逸脱として位置づけられ、閉鎖的な社会からの解放を求める民衆の抵抗や反乱や女性や子供など社会的弱者に目を向けた歴史研究へと展開した。また祝祭研究は王室の儀礼、教会の儀礼、市町村主催の儀礼にも分類されて分析された。とりわけ「日沈むことなき帝国」を象徴してハプスブルグ朝スペインについては、国王の誕生から死まで戦勝記念を含み、数多くの王室儀礼が研究された。なかでもハビエル・バレラ(1994)による当時のスペイン人の「死」に対する態度をテーマにした劇場型祝祭の研究は、その後のスペインの祝祭研究のモデルとして高い評価を得た。近年、ガルシア・ベルナル(2006)が祝祭で朗読される詩や説教などを主たる史料とし、そのメッセージを読み解くコミュニケーション祝祭というジャンルも開拓されている。こうした中、スペインの植民地における祝祭研究は進んでいなかった。

(2) スペインのアメリカ植民地で執り行われた祝祭は、先住民由来のもの、キリスト教由来のもの、アフリカ由来のものがある。スペイン王室固有のものは副王の着任式である。なかでも教会が執り行うキリスト教の祝祭は、先住民に対する布教を推進する上で重要な役割を担った。そして、先住民文化にキリスト教文化が取り込まれ新しい文化が創造されたとして、民族学や文化人類学の立場から数多く行われてきている。このように植民地研究では先住民を中心に据えた研究が圧倒的に多いため、都市のスペイン人の動向にはほとんど関心が払われてこなかった。しかし、国王不在の植民地において、スペイン人にとっては、スペイン王室の儀礼を執り行うことは、本国への忠誠を誓うという側面もあり、重要なことであった。当然、植民地由来のものもあった。それが戦勝記念の日である。アメリカ植民地の主要都市であったメキシコあるいはペルーでは、スペ

インによる征服戦争の戦勝と先住民のキリスト教改宗の成功が祝われた。征服戦争の是非を問うたバリャドリッド論争は先住民擁護を謳ったインディアス新法の制定につながったが、そのインディアス新法は当時にヌエバ・エスパーニャとペルーにおいて征服記念式を実施することを義務づけている。しかし、この祝祭がどのようなもので、どのような意義があったのかについては明らかではなかった。

(3) 聖イポリト祭について言及した先行研究は 3 本のみであった。ラミレス・シエラ(2009)が 1528 年から 1530 年代の議事録における聖イポリト祭や聖週間に行われた演劇から、メキシコの演劇の発祥を探ろうとした。しかし、ラミレス・シエラが浮き彫りにした祝祭は王室のイメージを意識した政治プロパガンダ的で、17 世紀バロックの特徴を備えていて、征服直後の 16 世紀の事情には即さないと言わざるを得ない。またヒラウド(1999)とガリード・アスペロ(2004)は、独立前夜 1808 年にメキシコ市参事会が聖イポリト祭に先住民を参加させるか否かを議論したことから、カディス憲法における先住民の立場について論じている。しかし、いずれの論文も、聖イポリト祭がどのような祝祭であったかについては不明だとしていた。

2. 研究の目的

本研究の目的は、メキシコがスペインに支配された植民地時代およそ 300 年間にわたってメキシコ市が開催した聖イポリト祭の準備、意義、重要性などを明らかにすることにあった。この祝祭は、アステカ帝国の首都テノチティトランがスペイン人の手によって陥落した毎年 8 月 13 日聖イポリトの日に行われ、スペイン人がメキシコ征服を祝うものであった。本研究では、この祝祭に関する史料の実証的研究を行い、スペイン人第二世代であるクリオーリョが植民地支配において担った役割を検証し、植民地史の新しい解釈を提示することにあつた。具体的には、以下の 3 つを主たる研究項目とした。

(1) 聖イポリト祭の準備および実施の実態を 16 世紀から 19 世紀初頭にわたって実地調査及び分析を行うものとした。分析項目は、聖イポリト祭開催費用と財源、主催者であるメキシコ市参事会の機能と役割、同参事会と聖イポリト教会の関係、聖イポリト祭開催をめぐる同参事会と副王の関係、聖イポリト祭への先住民の参加状況とした。

(2) 祝祭の開催目的が征服を祝うこと以外にも複数存在することを実証し、それらの目的の変遷を分析するものとした。

(3) この祝祭の重要性を読み解き、従来の研究とは異なり、クリオーリョの視点からメキ

シコ植民地支配を捉え直す新しい解釈を提示するものとした。

3. 研究の方法

本研究は実証的研究であるため、聖イポリト祭に関する以下の史料の読み込みが中心となった。

(1)メキシコ特別連邦区文書館所蔵のメキシコ市参事会議事録(1524年から1820年まで)

(2)メキシコ大聖堂付文書館所蔵の大聖堂日誌(16世紀を中心に)

(3)メキシコ国立公証書文書館所蔵の公証人作成文書(ホセ・デ・アランス公証人作成の1604年から1627年までの文書群、ペドロ・サンティリャン公証人作成の1614年から1660年までの文書群)

(4)インディアス総合文書館(在スペイン)所蔵のスペイン国王勅令、メキシコ副王によるスペイン国王宛の書簡ほかメキシコ市および聖イポリト祭に関連する文書

以上の文書を丹念に読み込むことで、聖イポリト祭の準備および実施の実態を明らかにし、その重要性を分析し、スペイン人によるメキシコ支配を捉え直した。

4. 研究成果

(1) 聖イポリト祭はヌエバ・エスパーニャの征服記念の祝祭であった。1528年にメキシコ市参事会がその日に闘牛と馬上槍試合を催して祝うという当時最も壮麗な祭りとして位置づけ、1528年から1812年にカディス憲法によって廃止されるまで約300年間続けられた。勅令により、この祝祭を中止したり、日時を変更したりすることは許されなかった。毎年8月12日夕方4時頃から始まり、王旗を掲げて中央広場からイポリト教会まで行進し、その晩は参加者が旗手の家での晩餐に招かれた。翌日8月13日午前11時に再び王旗の行進があり、その後、3日間、闘牛、馬上槍試合、演劇、詩の朗読などが行われた。しかし、こうした祝祭の各行事は300年間を通じて華やかな雰囲気で行われたのではなく、メキシコ市が抱えた問題と連動して、時期によって異なっていた。

(2) 聖イポリト祭は、まず、1521年から1572年は、先住民からの報復や反乱を未然に防ぐためであった。王旗を掲げ、メキシコ市の中心部から先住民居住域との境界にある聖イポリト教会まで、スペイン人が武装して、馬に乗って行進することによって、先住民にスペイン人の軍事的優位をみせつけるためであった。メキシコ征服後、スペイン人は中米やカルフォルニアなどに遠征を繰り返したため、メキシコ市は無防備になっていた。当

時、16世紀末、メキシコ市には75,000人の先住民人口に対してスペイン人人口は8,000人というデータも発表されている。モトリニアは、「メキシコ市にはおよそ馬50頭とスペイン兵200人ほど残っていたように思う。そこにちょうど先住民が皆終結して、キリスト教徒に反乱を起こして皆殺しにしようとしていた」と深刻な状況を語っている。従って、先住民に対しては警戒を怠らず、聖イポリト祭では参列者は甲冑に身を包み、武器をそろえて行進したのであった。その王旗行進の経路は、湖上都市メキシコの中心部と唯一地続きで島の外へ通じる要所でもあった。当時のスペイン人は、先住民が完全に平定されていないことを承知しており、先住民が蜂起すれば、自分たちはアステカの神々への生け贄となることを大変恐れていたことが明らかになった。

(2)メキシコ市参事会の議事録を分析すると、1570年代後半に祝祭は盛り上がりを見せたことがわかる。前述の恐れは払拭され、聖イポリト祭は本来のキリスト教的な祭として開催された。1571年にローマから聖イポリトの聖遺物がメキシコにもたらされたからであった。1578年、メキシコ市はフェリペ2世に対し、聖イポリトをメキシコ市の守護聖人に求めた。この請願が正式に聞き入れられたことを証明する文書は見つかっていないが、例えば、モトリニアの愛称で知られるフランシスコ会士トリビオ・デ・ベナベンテは、1569年に聖イポリトがヌエバ・エスパーニャにとって特別な守護聖人であると断言している。その後、1621年の征服百年祭には、スペイン本国に征服をテーマにした演劇の脚本を依頼して祝うなどの準備も行われたが、史料が伝える様子はそれほど特別な雰囲気ではないことがわかった。

(3) 聖イポリト祭のメインイベントである王旗行進の経路は、飲料水を確保するチャプルテペック水道橋に平行しており、聖イポリト祭を行うことによって、メキシコ市のライフラインを確保する目的があったと考えられる。フェリペ2世も、聖イポリト教会は市内に水を引くため水路の途中に位置するため、周辺における先住民とスペイン人の対立を懸念していた。一方、メキシコ市は水害にも悩まされた(1553年、1555年、1579-1580年、1604年、1607年、1615年、1623年、1627年、1629年)。とりわけ1629年の洪水は聖書の大洪水に喩えられるほどの被害で、排水に5年かかり、実に90%の住民が近隣都市へ避難したとされる。1629年の聖イポリト祭は中止となったが、翌年は副王自らカヌーに乗って王旗行進を決行し、外出禁止の修道女らに食糧をはじめとした生活必需品を届けたほどであった。水害後の水路の清掃には、先住民が有給で雇われ、とくに聖イポリト祭の前に行われていたことから、聖イポリト祭

にて王旗行進を実施することが重要であったことがわかった。

(5)王旗行進とその後に行われた馬上槍試合は、16世紀後半から赴任した歴代副王がヌエバ・エスパーニャ防衛のために奨励した馬術訓練の場となった。征服後、先住民が平定されると、コンキスタドーレスらは年老いて馬に乗れなくなり、第2世代は馬の乗り方さえ知らないようになった。馬車の導入の影響も大きかった。1577年には、植民地では防衛のために武力行使を余儀なくされる可能性があるとして、防衛馬車使用禁止例が発令されている。副王モンテレイ侯爵（在位：1659年-1603年）および副王モンテスクラロス（在位：1603年-1607年）はとりわけ熱心に馬術鍛錬を奨励した。前者は国王に宛てて、聖イポリト祭がこの地に根付き、毎年執り行われるように尽力しなければならない、そうでなければこの良き習慣と鍛錬が衰退してしまう、と懸念を表明した。後者は、財政不振に陥り、祝祭の費用を捻出できなくなったメキシコ市に対して、副王自ら費用負担を申し出て、聖イポリト祭の開催を強く求めた。市は従来の祝祭期間を1週間から3日に短縮して、実施した。

(6)メキシコ市参事会は、スペイン国王やヌエバ・エスパーニャ副王に代わって、聖イポリト祭の財源や参加者を準備した。市参事会は毎年6月初旬から8月末まで、副王と毎日のように連絡をとって準備を進めた。祝祭の費用は、メキシコ市が所有する建物や土地の賃貸料や水害被害対応の予算が充てられ、聖イポリト教会までの道路の清掃や補修工事が行われた。聖イポリトの彫像は銀細工職人組合が寄進し、王旗行進の衣装や馬は参加者である参事会議員の個人負担であった。

(7)先住民たちは祝祭期間中、市内に出入り禁止であったが、祝祭の楽隊としては参加を認められていた。

(8)メキシコ市議員は聖イポリト教会に布施を収めているため、議員たちは兄弟会を結成していた可能性が高いが、兄弟会規約書が見つかっていないため、検証できなかった。

(9)今回の研究では、史料研究に留まらず、聖イポリトの図像研究も行った。その結果、メキシコ国立歴史博物館所蔵「聖イポリトと祈りをささげる征服者モルテス」に代表されるように、この聖人が征服者たちを弔うために礼拝堂などに飾られた可能性を指摘した。また、フランツ・マイヤー美術館所蔵「聖イポリトとメキシコの紋章」は、メキシコ征服にあたってスペイン人に味方したトラスカラ族の貴族が注文した絵であることに注目し、聖イポリトが線純からも崇拝されていたことを明らかにした。さらに、18世紀に作

成され、メキシコ大聖堂所蔵の聖イポリトに捧げるミサ曲に施されたミニアチュールから、銀細工職人による聖イポリト祭への強い関与を明らかにした。

(10)この祝祭はあくまでもスペイン人によって先住民に対して行われていたものであり、第二世代のクリオーリョは関心を示さなかったことも明らかになった。従って、クリオーリョの視点に立つと、とりわけ17世紀のメキシコ植民地時代は、政治や経済活動が首都メキシコ市を離れ、地方都市において活発であったことが判明した。従って、とりわけ17世紀のメキシコ植民地時代は、征服者による首都集中型支配から、第二世代による地方分散型支配へと変化したという解釈を提示するに至った。

(11)以上の成果は、スペイン及びメキシコの歴史研究者から成る検討委員会に提出し、高い評価を得た。検討委員は、スペイン王立アカデミー教授カルロス・マルティネス・ショウ博士、スペイン科学高等研究所イソパノアメリカ研究所教授マリア・フステーナ・サラビアピエホ博士、スペイン国立通信大学教授ファン・アントニオ・サンチェス・ベレン博士、サンティアゴ・デ・コンポステラ大学教授マリア・フリヤ・パソス・パソス博士であった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

Reiko Tateiwa, La rebelión del marqués del Valle: Un examen del gobierno virreinal en Nueva España en 1566 (デル・バリエ侯爵の反乱 - 16世紀ヌエバ・エスパーニャ副王政府とクリオーリョの関係についての一考察 -)” *Tiempo, Espacio y Forma*, 査読有, 印刷中。

立岩礼子「メキシコ市参事会における旗手をめぐる考察(1528年-1650年)」『京都ラテンアメリカ研究所紀要』査読有, Vol. 12, 2012, pp. 63-78.

〔学会発表〕(計2件)

立岩礼子「メキシコ市における防衛と祝祭の関連性-聖イポリト祭から-」日本ラテンアメリカ学会第36回大会、2015年5月30日、専修大学生田キャンパス(東京都多摩市)
Reiko Tateiwa “Fiesta de San Hipólito: una fiesta para defender la ciudad de México (siglo XVI y la primera mitad del siglo XVII)”, Justina Sarabia in memoriam, Instituto Nacional de Antropología e Historia, Dirección de Estudios Históricos (メキシコ国立文化人類学及び歴史学研究科歴史研究科主催サラビア教授追悼記念研

研究会) 2013年3月21日、メキシコ(メキシコ市)

〔図書〕(計1件)

María Luisa Pazos Pazos, Veronica Zárate Toscano, Eduardo Flores Clair, Reiko Tateiwa, “Fiesta de San Hipólito: una fiesta para defender la ciudad de México (siglo XVI y la primera mitad del siglo XVII) (メキシコ市防衛のための祝祭)”, *Memorias sin olvido: el México de María Justina Sarabia*, Universidad de Santiago de Compostela, 2014, pp. 153-168.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

立岩 礼子 (Tateiwa, Reiko)

京都外国語大学・外国語学部・教授

研究者番号: 80321059